

ゼロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治

青空文庫

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲こうきようきよくの練習をしていました。

トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いる風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼めを皿さらのようにして楽譜がくふを見つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額あせに汗

を出しながらやつといま云われたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていきますと楽長がまた手をぱつと拍ちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込んだりじぶんの楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思っていると楽長がおどすような形をしてまたぱたと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきつとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこできつきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏んでどなり出しました。

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがあの金沓鍛冶かなぐつかじだの砂糖屋でつちの丁稚ていぢなんかの寄り集りに負けてしまったらいつたいわれわれの面目めんもくはどうなるんだ。おいゴーシユ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒おこるも喜おこぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴くつのひもを引きずつてみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しっかりしてくれないとねえ。光輝こうきあるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒たまだから。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかつきりボックスへ入つてくれ給え

「
みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマツチをすったりどこかへ出て行ったりしました。ゴーシユはその粗末そまつな箱はこみたいなセロをかかえて壁かべの方へ向いて口をまげてぼろぼろ涙なみだをこぼしましたが、気をと直してじぶんだけたったひとりいまやつたところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅おそくゴーシユは何か巨おおきな黒いものをしよってじぶんの家へ帰つてきました。家

といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるとさっきの黒い包みをあげました。それは何でもありません。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床の上にそと置くと、いきなり柵からコップをとってバケツの水をぐくぐくのみました。

それから頭を一つふつて椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめぐりながら弾いては考え考えは弾き一生けん命しまいまで行くともたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎしてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまつ赤になり眼もまるで血走つてとても物凄いや顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見えました。

そのとき誰かうしろの扉をとんと叩くものがありました。

「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押しはいて来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

ゴーシユの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシユの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬うんぱんはひどいやな。」

「何だと」ゴーシユがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシユはひるからのむしやくしやを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなご食うか。それからそのトマトだっておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしって。いままでもトマトの茎くきをかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行ってしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩かたをまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらって云いました。

「先生、そうお怒りになつちや、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしやくにさわってこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮えんりよはありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかり赤になってひるま楽長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかに気を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思つたか扉とにかぎをかつて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室へやのなかへ半分ほどはいつてきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭ふいて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思つたかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「印度インドの虎狩とらがり」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチツと眼をしたかと思うとぱつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけましたが扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシユはすっかり面おもしろ白くなつてますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからも先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってはねあがつてまわったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁にいたあととはしばらく青くひかるのでした。しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシユをまわりました。

ゴーシユもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。

すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしやくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口に
くわえそれからマツチを一本とつて

「どうだい。工合ぐあいをわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖とがつた長い舌をべロりと出しました。

「ははあ、少し荒あれたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマツチを舌でシュツとすつて
じぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕おどろいたの何の舌を風車のようにふりまわしながら
入り口の扉とへ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻もどつて来てどんとぶつ
つかつてはよろよろまた戻つて来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようと
しました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱かやのなかを走って行くのを見てちよつとわらいま
した。それから、やつとせいせいしたというようにぐつすりねむりました。

次の晩もゴーシユがまた黒いセロの包みをかついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシユはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシユが叫びますといきなり天井てんじょうの穴からぼろんと音がして一疋びきの灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシユが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシユは笑つて

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」
するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこうとこうなくのとでは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかっているなら何もおれの処ところへ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついでうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾ひいてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取り上げてポロンポロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきま

した。するとかつこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなでないです。」

「うるさいなあ。ではおまえやつてごらん。」

「こうですよ。」 かつこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かつこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響こくごきようが楽くも同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」 セロ弾きはまたセロをとって、かつこうかつこうかつこうかつこうかつこうとつづけてひきました。

するとかつこうはたいへんよろこんで途とちゆう中ちゆうからかつこうかつこうかつこうかつこうとついで叫さけびました。それももう一生けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシユはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかつこうは残念そうに眼めをつりあげてまだしばらくくなくないていました。がやっと

「……かつこうかくうかつかつかつか」と云つてやめました。

ゴーシュがすつかりおこつてしまつて、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わつてるんではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか。」かつこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かつこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」といつてまた一つおじぎをしました。

「いやになつちまうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかつこうはまたまるで本気になつて「かつこうかつこうかつこう」とからだをまげてじつに一

生けん命叫びました。ゴージュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけ
て弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているか
なという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするの
でした。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になつてしまうんじゃないか。」とゴージュ
はいきなりぴたりとセロをやめました。

するとかつこうはどしんと頭を叩たたかれたようにふらふらつとしてそれからまたさつきの
ように

「かつこうかつこうかつこうかつかつかつ」と云いつてやめました。それから恨うらめ
しそくにゴージュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでもものどから血が出るまでは叫
ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見ろ。夜
があけるんじゃないか。」ゴージュは窓を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになつてそこをまつ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですから。」

かっこうはまた頭を下げました。

「黙れだまつ。いい気になつて。このばか鳥め。出て行かんとむしつて朝飯に食つてしまふぞ

。」

「ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかっこうはにわか**に**びつくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。

そして硝子ガラスにはげしく頭をぶつつけてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」

ゴーシュはあわてて立つて窓をあげようと思いました。が元来この窓はそんな**に**いつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかっこうがばつとぶつつかつて下へ落ちました。見ると嘴くちばしのつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待つていろつたら。」

ゴーシュがやつと二寸ばかり窓をあけたとき、かっこうは起きあがつて何が何でもこんどこそというようにじつと窓の向うの東のそらを見つめて、あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあつてかっこうは下へ落ちたまましばらく身動きもありませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは眼

をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシユは思わず足を上げて窓をぼつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなつてしまいました。ゴーシユはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡つてしまいました。

次の晩もゴーシユは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいきますと、また扉をこつこつ叩くものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかつこうのようにはじめからおどかして追い払つてやろうと思つてコップをもつたまま待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一足の狸の子がはいつてきました。ゴーシユはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、「こら、狸、おまえは狸汁ということを知っているか。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座つたままどうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたつて

「狸汁つてぼく知らない。」と云いました。ゴーシユはその顔を見て思わず吹き出そうと

しましたが、まだ無理に恐い顔をして、

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮ておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」
狸の子は俄に勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓の係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手

にとつてわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシユは狸の子がどうするのかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロの駒こまの下のところを拍子ひょうしをとつてぼんぼん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシユはこれは面白おもしろいぞと思ひました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやつと考えついたというように云いました。

「ゴーシユさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅おくれるねえ。なんだかぼくがつまづくようになるよ。」

ゴーシユははつとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたつてからでないと言が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシユはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんと叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよってゴムテープでぱちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいってくる風を吸っていました。町へ出て行くまで睡って元気をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうとしていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかなないのでゴーシュはおもわずわらいまし

た。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきよろきよろしながらゴーシユの前に来て、青い栗くりの実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児こがあんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲じひになおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシユはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまつていましたがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎うさぎさんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったこととはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行つたがね。ははん。」

ゴーシュは呆あきれてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野の鼠ねずみのお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児こはどうせ病気になるならもつと早くなればよかった。さつきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになったのに、病気になるといっしょにぴたつと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびつくりして叫こぼびました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや鬼の病気がなおると。どういうわけだ。それは」。

野ねずみは眼めを片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここらのものは病気になるるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療なすのでござ
います。」

「すると療なるのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなつて大へんいい気持ちですぐ療なる方もあればうちへ帰つてから療なる方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病気がなおるといふのか。よし。わかったよ。やってやろう。」ゴーシユはちよつとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔あなから中へ入れてしまいました。

「わたしもいつしよについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おつかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロに飛びつきました。

「おまえさんはいるかね。」セロ弾きはおつかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊かのような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫だいじょうぶさ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシユはおつかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをごうごうがあが弾きまし

すると野鼠はびつくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨ふくらんでいておいしいものなそうでございですが、そうでなくても私もはおうちの戸棚とだなへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びに难道参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシユはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシユはねどこへどっかかり倒たおれてすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏うらにある控ひかえ室しつへみんなぱつと顔をほてらしてめいめい楽器をもって、そろそろホールの舞台ぶたいから引

きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手はくしゅの音がまだ嵐あらしのように鳴って居おります。楽長はポケットへ手をつっ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉うれしきでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマツチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなつて何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。

「アンコールをやっています、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなつて答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したつてこつちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸ちよつと挨拶あいさつしてください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆あっけ氣にとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシユに持たせて扉とをあけるといきなり舞台へゴーシユを押し出おしてしまいました。ゴーシユがその孔のあいたセロをもつてじつに困つてしまつて舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そらうひどく手を叩たたきました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度インドの虎狩とらがりをひいてやるから。」ゴーシユはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫ねこの来たときのようにまるで怒おこつた象いきおいのような勢で虎狩りを弾きました。ところが聴ちようしゆう衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシユはどんどん弾きましました。猫が切ながつてぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシユはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもつて楽屋へ遁にげ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあつたあとのように眼をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシユはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつさとあるいて行つて向うの長椅子ながいすへどっかりとからだを

おろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが樂長は立って云いました。

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけれどもここではみんなかなり本気になって聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立って来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな。」
樂長が向うで云っていました。

その晩遅く^{おそ}ゴーシュは自分のうちへ帰って来ました。

そしてまた水がぶがぶ呑み^のました。それから窓をあけていつかかっこうの飛んで行つたと思つた遠くのそらをながめながら

「ああかつこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたんじゃないんだ。」と

云いました。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：水口充、野口英司

校正：野口英司

1999年7月23日公開

2008年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

セロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>